

# 一年の作品



## 旅と文学との出会い

東谷山中一年 竹下琴海

八月六日、朝四時に起き、あわただしく支度を済ませ、家を出た。興奮していたのだろうか、少しも眠くない。なぜなら、ずっと自費で行けなかった旅に出かけることになったからだ。駅に着くと、切符の手続きを済ませ、始発の新幹線に一歩足を踏み入れる。車体がスワツと滑るように動き出す。いよいよ旅の始まりだ。

遠くに見える山際が淡い桃色に染まっていく。車窓についた雨つぶが朝の光を受けてキラキラと輝いている。こんな幻想的な風景が見られるとは。早起きしてよかった。窓に映し出される風景は、次々と移り変わり、あっという間に目的地についた。ここは山口だ。ここからレンタカーを借り、向かうのは島根県津和野町だ。

しばらく車を走らせていると、山裾にぼつりぼつりと、赤く艶やかな瓦をのせた民家が見えてきた。山の緑に赤色が映え、美しい風景を目にすることができたり、どのような思いだっただろう。

この旅の偶然的出来事で、私は森鷗外に興味をもつようになった。旅を終えてから、鷗外の生涯や作品について調べてみた。その中でも、気軽に読めそうな短い作品「高瀬舟」を読んでみることにした。高瀬舟は、弟殺しの罪で遠島の刑に処せられた「喜助」と、その喜助を護送する役目をもった京の町奉行付きの同心「羽田庄兵衛」のことを書いた短編小説だ。庄兵衛が喜助の話を聞いているうちに、幸せというものは何かを考えていく。喜助と庄兵衛という身分の違いを超えた対等な関係を描く鷗外の優しさを感じられた。

また、今年には鷗外の没後百年ということもあり、新聞で鷗外について書かれた記事を見つけるとつい気になって読むようになった。一番最近の記事では、鷗外が生きている時代に出会った夏目漱石や与謝野晶子、石川啄木など有名な作家を始め、その時代に活躍した人々からの四百点にもなる書簡が発見されたとのこと。実際、その時代に生きていた作家たちとの交流に思いをはせ、それらの作品も読んでみたくなった。

今回の旅行で鷗外に出会ったことで、文学への旅の入り口を開いてもらった気がする。もし、これからしばらく旅に出かけられなかったとしても、文学への旅を楽しむことにしよう。

て、美しい。この地方独特の石州瓦だ。私のイメージする日本の原風景そのものだった。約一時間後、山陰の小京都ともいわれる津和野に着いた。

駅前には車を停めようとする人、何やら人だかりができていた。何事だろうか、と気になり、見に行ってみることにした。しばらくすると、「ポーツ」という汽笛とともにゆつくりと列車が駅に入ってきた。

「おかえりなさい、鷗外先生。」

と、皆が口々に声を上げた。この日は、森鷗外没後百年に合わせ、新しくなった津和野駅でセレモニーが行われていたのだった。歓迎の太鼓や笛、踊りで迎え待つ人々。わくわくした気持ちで待っていると、乗客に混じって鷗外先生がやってきた。黒い紋付きはかまに草履を履き、口元には立派なひげをたくわえている。鷗外先生に扮した俳優だったのだが、まるでその時代にタイムスリップしたようだった。町の人々も、皆笑顔で、帰郷を喜んでくれるようだった。森鷗外は、十歳で上京した後、一度もふるさとの津和野に帰省できず、「鉄道が津和野まで開通したら帰る」と当時の町長に伝えていたが、開通のおよそ一か月前に亡くなってしまったそうだ。きつと無念だっただろう。やつと念願が叶えられたようだった。

私は、三年ぶりに念願叶つての今回の旅行だったが、初めて見る津和野の風景や町並みの美しさに心を動かされた。鷗外も生前、もう一度この津和野の地を踏み、幼少期を過ごした懐か